

# 山と博物館

第34巻 第7号

1989年7月25日

大町山岳博物館

特集 日本山岳画協会大町展 7/23~8/27



夏の梅池高原 足立真一郎

山旅素描

足立真一郎

### 初秋の高原

夏山でふまれた路も九月末になると、さすがにハイカーもとだえて、草路のまま歩きにくくなっていく。  
 その頃、小雨もすっかりやんで、赤々と映えた夕空に白馬岳連峰はシルエットのようにそびえていた。  
 落倉の辺からどうやら路にまよったらしい。薄暮の中に白樺の幹のみが白く、くつきりと浮んでみえる。この辺は湿地のせいか、各所に水たまりが多い。この水たまりに秋雲の影を落として、さながら天然色映画をみているような美しさである。

私は森上へでるつもりでいたのが、いつのまにか、想像のつかない山村へでってしまった。宿へついてから、おかみにたずねたら千国と言う部落だった。私の歩いたあの美しい高原は、たぶん阿弥陀山の高原であつたらしい。そしてカラーフィルムでみるような湿地帯は桶川にそつた親の原であつた。

夏の神の田圃から見る初秋の白馬岳連峰も実に美しい。ひなびた山村を絵にすることが出来たのも路にまよつたと思わぬひろいものであつた。

### 雪山を見る

秋から冬に変わりゆくころになると、私は毎年どこかの山に取材にでかける。

ヒマラヤから帰ると、十二月にはいつて信州の山を歩きたまわつた。歩きなれた白馬山麓ならどこでもいいと思つた。いつもみなれた風景ではあるが感動は新たなものがある。東京を出るときは雪山を描くのが目的だが、山にはいるともう絵を描くことはどうもよくなつて、雪の山路を歩くことだけだのしくなつてくる。もういくつかの雪で山は明るく、どこも見通しがよくなつてきた。前方の雪の斜面に白樺の幹が光っている。この季節でなければ味わえない白と白との諧調、けふるようなうす紫色にみえる雑木林、その後に新雪をたふりつけた山がみえる。歩いて行くとそのむこうにまた雪をつけた山が見えてくる。爺ヶ岳につづく後立山の稜線である。登るにつれて山のかたちがちがつてくる。こんどはいろいろの角度から雪山を見たくなつてくる。

私は足にまかせて雪路をあらちと歩きたまわつた。

(日本山岳画協会会員)

Association  
des Artistes  
Alpins

# 日本山岳画協会のあゆみ

藤江 幾太郎

日本山岳画協会は昭和十一年一月、会員、足立源一郎、中村清太郎、茨木猪之吉、石井鶴三、石川滋彦、小菅徳二、丸山晚霞、染木照、武井真澄、吉田博、末光清、内野猛、(顧問、小島鳥水、藤木九三)にて創立した。

創立に際し中村清太郎は、日本山岳会々報(昭和十一年三月号)に、日本山岳画協会の創立に就てと題して次のように述べている。日本山岳画協会は一言で申せば好んで山を描く畫家の集団でありまして、今迄夫れ夫れの道に精進して居た人々を横に連ねて、互に親しみを増し、作画にも発表にも便宜を加へ、鑑賞や研鑽の機を多くしやうというやうなわけでありませう。……以下略



石井鶴三氏(昭和36年、20回展会場にて)

という次第で第一回展は同年七月東京日本橋・高島屋で華々しく開催された。以降毎年同店にて展覧会が開かれた他、昭和十二年以降大阪・大丸でも開催が続いたが、戦局の進展に伴い高島屋展は昭和十八年第八回展でひと区切りつくことになる。この間戦後の山岳画会に活躍する中村善策、山川勇一郎、上田哲農、河越虎之進が新会員として迎えられる。

日本山岳画協会(以下山岳画会と称す)はその目的から会長はなく、その時々々の適当な会員が事務所を引受けて来た。最初は記録によると茨木猪之吉が事務所を引受けている。この茨木猪之吉の遭難について「スポーツ毎日」(37・3・11)の切抜きがあるから摘記してみよう。

昭和十九年九月十九日、氏はただひとり絵筆を片手に上高地へ入った。戦時中とあって登山者は殆んどなく、現在の上高地銀座も実にひっそりとしたものであった。

ここで、二十三日まで作画し、二十三日徳沢へ入って一泊。翌日濁沢小屋へ入った。二十三日まで上高地の西糸屋に宿泊したが、出発の際、いつもの茨木氏らしくなく、何回も何回もふりかえってなつかしそに西糸屋の人たちにあいさつをしたという。

西糸屋のおかみさんは「先生にしては珍しいことだと思いました」とのちになって語っていたが、この時すでに

に虫が知らせたのだから。あるいは、自殺説が本当ならば、さういふ別れを惜んでいたのかも知れない。

とにかく濁沢小屋でもまた作画し、出発予定の九月三十日は終日雨のため、停滞した。ちょうど小屋をとじる人夫たちが小屋にいたので、コタツで賑やかに談笑してすごした。翌十月一日も岩が濡れているので滞在、二日に出発した。

この日、氏は午前七時ごろ弁当一食分をもつて、穂高小屋へ向かった。天候が晴れていたので小屋を飛び出したのだが、午後から濃霧が出て、濁沢小屋からは前穂高の頭がみえなくなるほどだった。

したがって、氏の穂高小屋での作画は出来はずがなく、おそらく氏はすぐ白出沢を下って槍見へ向かったにちがいない。十月一日長女にあてて出したはがきには、二日早朝、山越えて飛驒側に入り、槍見温泉に泊まり、さらに高原川を上り平湯温泉に泊まる。そしてこの付近の山風俗をみて、その後安房峠を越して上高地へ戻る。松本市には七、八日ごろ着く、とされるされていた。

ところが、七日すぎても八日をすぎても上高地へかえってこなかった。ここで「ある山岳画家の死」の題名の切抜きは終っているが、先般九十九歳で亡くなられた河越虎之進は、この帰途を松本で落ち合うことになっていたという話もある。河越は昭和十五年に会員として加入しているので確からしい話と思われる。

## 二十回展によせて

二十年経けて  
やつと青年に達した  
頂上はまだ遙か上の方だ  
風雪に耐えて幾万年  
巖然と山が聳えている如く  
痛、これからも  
山の精神を絵にしていきたい

日本山岳画協会

昭和二十年の終戦は山岳画会どころでなく一時中断、画壇の各会も同様であったことは多くの人の知る通りである。

戦後の山岳画会事務所は一応山川勇一郎方に置かれたが、中々思うように立直るには戦後の混乱が治まらなかつた。会場も日本橋・三越、銀座・松屋、東京・大丸と転々と変り、昭和三十五年から数年上野・松坂屋に落ちついたように見えたがこれも長続きはしなかつた。ここに昭和三十七年上野・松坂屋展の時の目録があるので見てみよう。(出品者)

足立源一郎、足立真一郎、伊川鷹治、石井鶴三、上田哲農、江藤純平、大久保作次郎、大河内信敬、大野権(現、熊谷権)、萩原孝一、春日部たすく、加藤水城、金子保、河越虎之進、木和村創爾郎、小泉繁、島野重之、田村一男、寺居健一、中村清太郎、長坂春雄、二重作竜夫、びしょつふ泰子、藤江幾太郎、南政善、三輪孝、横山義雄、山川勇一郎の諸氏で、事務所は三輪孝から寺居健一に移った。



山川勇一郎氏(昭和36年、20回展会場にて)

一方我国登山界も戦後の移り変りが目について来た。昭和二十七年、深田久弥をリーダーとする探査隊に、会員の山川勇一郎が加わり、ネパールのジュガルヒマールからランタン谷に遠征して多くの収穫を発表した。山川勇一郎個展は昭和三十三年十二月、日本橋高島屋筋向いのヤナセ・ギャラリィで、油彩とスケッチを発表し、氏が所属している一水会で出品したヒマラヤを主題にした油彩大作二点は、一水会優賞が授与された。ヒマラヤ行の画集を山と溪谷社から発行した。その序文の中で深田久弥は「ヒマラヤ(ネパール)へ画家として入ったのは、山川君が最初の人だろう……おそらくこれだけのヒマラヤの画集は、世界でこれが初めてだろう」とこの画集を世に推奨している。

その翌年新宿伊勢丹で、山川勇一郎の遺作展が所属する一水会、山岳画会等の主催で盛大に行われ、山川勇一郎のライフワークが一堂に展覧され、参観者に多くの感銘を与えた。

また、翌日の新聞では「奇跡の救出も空し、山川氏、凍傷で死ぬ、アンデス転落から五日目」の大見出しでこの事件を報道した。山川はクレバス中より救出されたが骨折、全身凍傷甚だしく十一月十二日十七時三十分絶命、翌日サンチャゴに空輸されたのだった。

昭和四十年十一月十三日の朝日新聞は「クレバスの底で生きていた、山川画伯を空から発見」の見出しで、空から搜索の結果、高度約四千五百米の地点でクレバスに落ち込んでいるのが発見された」と報道した。

昭和四十年十一月には大阪府岳連、岳友クラブの中央アンデス登山隊に同行サンチャゴを出発し、同月九日ロス・バルデス地区、ローマ・ラーガ氷河第一キャンプ付近にて、一時以降山川は消息を絶った。

飯山達雄の手記によると、山川とは乗鞍のスキー合宿の仲間であったが、奇しくもインカの古都クスコで偶然再会、チリ南端マゼラン地区、バイネ峯近くへも共に出掛けた。またアコンカグアへも同行したという。

昭和四十二年二月チリに向けて九州八幡を出帆した鉱石輸送船に便乗した。現今と全く事情の異なる時代である。

ネパール写生行の成功を基に、山川勇一郎は単身南米チリに向かった。もともと前記ネパール行の後、数年間ネパールが鎖国され、多くの登山隊がアンデスに向かったことと関係があるかも知れない。とにかく山川は昭和三十九年二月チリに向けて九州八幡を出帆した鉱石輸送船に便乗した。現今と全く事情の異なる時代である。



昭和42年、新宿・伊勢丹会場にて

向かって右から加藤水城、足立源一郎、石井鶴三、足立真一郎、伊川鷹治、熊谷樞の諸氏と筆者



河越虎之進先生を囲んで  
向かって右から牧潤一、関戸紹作、江村真一、  
前林章司と筆者(昭和57年、河越先生宅にて)

昭和四十一年、事務所は足立真一郎方に移るが、会場は三越、伊勢丹、小田急と移って永続せず事務所を悩ませた。昭和四十二年には創立会員の中村清太郎は「山岳湯仰」「ある鷹松の独白」の著書を残して他界し、昭和四十八年には足立源一郎、石井鶴三の両創立会員が他界して、大体現在々籍の会員の基底となった。歳々年々人同じからずの例もあり、昭和五十一年の会員名簿を一瞥しよう。

足立真一郎、石山庄一、江藤純平、江村真一、荻原孝一、春日部たすく、加藤水城、金子保、河越虎之進、梶田英一、熊谷権、倉原辰雄、関戸紹作、田村一男、寺居健一、楢原健三、びしよつぶ靖子、藤江幾太郎、藤本東一良、南政善、山里寿男、横山義雄。

筆者注  
題字上部の会名レタリング・デザ  
インは畦地梅太郎作。

(日本山岳画協会々員)

山岳画会名誉会員・大町市功労賞  
受章者・河越虎之進先生は、松本  
深志高校同窓会、中信美術会、当  
会合同主催で、本年三月松本のぎ  
やらりー島勇で「白寿記念展」を  
計画いたしました。が、まことに残  
念ながら記念展をまたず去る三月  
二十一日永眠されました。御冥福  
を祈ります。

追記

(文中敬称略)

この間昭和五十九年に、大町山岳博物館の  
ご好意ご協力により、我々山岳画会々員の力  
作発表の場を与えられ、一同心から感謝申上  
げて居りますが、本年はその第二回  
展ということで会員一同、前回以上  
の努力作出品の心構えでご来観下さ  
る諸彦に応えようと努力しますの  
宜しくご鑑賞願ひ上げます。

東京副都心の新宿に駅ビルが出来て、ここ  
にギャラリー・アルカンシェルがオープンした。  
昭和四十九年以降毎夏ここを根城に定期展を  
開き会員の作品を陳列した。その間時折神戸、  
そごう展も特別開催をした。

昭和五十三年事務所は藤江方になった。恒  
例の展覧会は新宿の駅ビルにあるギャラリー・  
アルカンシェルで続けられたが、画廊の都合  
もあり、大方の希望もあつて数寄屋橋際に新  
設の朝日アートギャラリーに昭和五十七年以  
降年次展が移った。今年で八回目になる。

博物館だより — オオライチヨウの雛が生まれました —

山岳博物館の付属園で飼育しているオオラ  
イチヨウは、同館と友好提携を結んでいるイ  
ンスブルック市のアルプス動物園から贈られ  
た国際親善動物です。また、日本では同館だ  
けで飼育している珍らしい鳥です。

六月に自然繁殖による初めての雛が誕生し、  
友好の使者としての大きな役目を果たしてくれ  
ました。オオライチヨウの受け入れやその後  
の管理、指導に尽力下さった内外の関係者へ  
の感謝をこめてご報告します。

山岳博物館にはオス3羽、メス2羽の成鳥  
を飼育していますが、今春の繁殖期を迎え、  
二ツガイを組合わせました。このうち一ツガ  
イが五月十七日から二十七日にかけて八個を  
産卵し、卵を温めはじめました。抱卵開始か  
ら二十七日目の六月二十二日に六羽の雛が誕  
生し、孵化した翌日から歩きはじめ、自分で  
エサを食べるようになりました。二羽は残念  
ながら死亡してしまいましたが、四羽は食欲  
も旺盛で活発に動きまわっています。



巣は卵を産みたすごとに松葉を集めて作る



アリの幼虫を食べる親とヒナ(23日齢)



孵化直後のヒナは親の腹下に入って  
温めてもらう時間が長い

山と博物館第34巻第7号  
一九八九年七月二十五日発行  
発行所 長野県大町市 TEL 0262-2211  
印刷所 大町山岳博物館  
長野県大町市俵町  
大糸タイムス印刷部  
定価 年額 一、三〇〇円(送料共(切手不可))  
郵便振替口座番号(長野四一)三三九二二